

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成三十年二月十日(土曜日) 午後二時三十分開演

演目解説 (金沢大学人間社会研究域教授 杉山 欣也)

狂言 しびり

遣いにやろうとする主人と行きたくない太郎冠者の駆け引きです。太郎冠者は親譲りの痺りがきれたと仮病を言い訳にします。主人が行う痺りのまじないや太郎冠者の宣命の含め方は、私たちも正座する時試してみましよう。仮病を見抜いた主人は、伯父の家に招かれて御馳走になる、太郎冠者同伴でと誘われたが、その痺りが出ては無理よのうと、こちらも作り話で応対します。太郎冠者が痺りに宣命を含めて立ち上がるのはこの時です。

能 杜若 (かきつばた)

諸国一見の僧(ワキ)が都見物のあと東国行脚あんぎゃを志して三河の国に着き、今を盛りの沢辺の杜若に見入るところへ、ここは杜若の名所八橋、並の花とは思わないで、と言いながら女(シテ)が現れます。女は伊勢物語で有名な在原業平の東下りの旅を僧に思い出させ、業平の形見の花が杜若であると親しく教えます。僧を自宅へ案内した女は、やはり業平の形見の品、五節の舞の冠と高子の後の唐衣からしもを身に着けて見せてくれます。女は杜若の精を名乗って業平は歌舞の菩薩ぼさつの化現けげんであると言い、伊勢物語の諸段とその古注をつないで業平の生涯を語り、かつ舞います。その業平の名残をとどめるのが杜若の花の色です。杜若の精は「植え置きし昔の宿の杜若：」の古歌を反芻はんすうして、自分の役割を伊勢物語の形見となることに見いだしています。僧を相手にその仕事は十分に成し遂げられました。夜が白々と明ける頃、杜若の花は悟りを開き、草木国土悉皆成仏みのもりの御法を得て消え失せました。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

(装束附)

鬘をつけ、鬘帯をしめ、小面または増の面をかける。

摺箔を着付けに着、縫箔を腰巻にし、腰帯をしめ、その上に色入唐織を着る。

物着に唐織を脱ぎ、覆懸(おいかけ)をつけた初冠をいただき、長絹を着る。